トラウマの子供たち（上）
～パレスチナ巡礼⑫～

今回のパレスチナ巡礼の目的の一つは、支援している、パレスチナ紛争の中でトラウマを抱えた子供たちの施設を訪ねることである。

トラウマとは、過去の大きなストレスを伴う出来事が現在に影響を及ぼしている心的外傷のこと。私がこの言葉を身近に感じるようになったのは、娘がパレスチナ問題にかかわるようになってからだ。

一九四八年、パレスチナにユダヤ人の国、イスラエルが建国され、そこに住んでいたパレスチナ人（アラブ人）との間でパレスチナ紛争が起こる。そして一九六七年の第三次中東戦争の結果、イスラエルはパレスチナ全域を占領下に置く。

これに対し、一九八七年から軍事力では対抗できないパレスチナ人がインティファーダ（民衆蜂起）という非武装による闘いで、投石、デモ、ストライキなどで抗議行動を起こす。これを阻止するため進攻してきたイスラエル軍との衝突の中でパレスチナ人の家屋が破壊されたり、大勢の死傷者が出た。これらを目撃した子供たちは深いトラウマを負った。

一九九六年、トラウマを抱えた子供の親たちの強い希望から、これに対処する施設が誕生した。ベツレヘムで家族カウンセリング・センターを運営していたカトリックのフランシスコ会のシスターが設立した「ホリー・チャイルド・プログラム（HCP）」である。

当初はアメリカ人シスターが中心であったが、二〇〇八年からは現地の優秀なスタッフによって管理・運営されており、運営は世界各地からの寄付によって賄われている。私たちもわずかではあるが支援活動をして来た。

娘がパレスチナの母子保健プロジェクトの一員として一九九五年にパレスチナに派遣されると、妻が中心となって娘の活動を支援する「ワード・パレスチナ、母と子の為のありんこちゃんの会」を設立し、支援活動を始めた（ワードはアラビア語で「約束」のこと）。バザーや寄付金などによる支援金は現地の貧しい母子の保健プロジェクトの資金に使われてきた。

七年後の二〇〇二年、娘が国際地域保健学を大学院で学ぶために帰国。それ以降は現地のフランシスコ会シスターを通じてHCPを支援して来たが、一度も活動を見たことがない。ただ資金支援するだけでなく、実際に自分たちの目で見て交わり深めるのも大切なことである。

しかし、私たちも高齢化し、特に妻が病気をした後は機関誌も中断、支援も先細りし、休会に近い状態となった。

前置きが長くなったが、今回の巡礼を機に、現地の活動を見学させてもらい、今後の方向性をはっきりさせようというのも、目的の一つだったのである。

複雑な現代社会、グローバル化が進む中で、宗教、人種、経済、地域格差などからさまざまな問題が出ている。そんな中で、一番弱い子供は心の傷に苦しむ。これは紛争下の子供たちだけの問題ではない。

施設代表夫妻から支援感謝状を受ける

持参したお菓子を配る娘